

購入文化財の概要

【絵画】

しほんたんさいぜんごせきへきず いけのたいがひつ

池大雅筆

1. 紙本淡彩前後赤壁図 寛延二年五月の年記がある
六曲屏風

1 双

区分：重要文化財（平成元年6月12日指定）

種別：近世絵画（南画）

法量：（各）縦148.0センチメートル 横348.2センチメートル

時代：江戸時代 寛延2年（1749）

日本の南画を大成した池大雅（一七二三～一七七六）による大作で、蘇軾の「前赤壁賦」と「後赤壁賦」を各隻の主題とする。各図には大雅が自筆で題記と前後赤壁賦の一節を書きつけ、寛延二年五月の年記と落款を添える。同年は大雅二十七歳にあたり、大雅の国指定品十五件のなかでは同年七月の年記を有する「陸奥奇勝図」（重要文化財、九州国立博物館保管）と並んで大雅の初期作品を代表する優品である。



【彫刻】

もくぞうごしんぞう やまとととひももそひめのみことぞう

2. 木造御神像 倭迹々日百襲命坐像

1 軀

区分：重要文化財（明治34年3月27日指定）

種別：木造／神像

法量：像高60.0cm

時代：平安時代

香川県水主神社に伝えられた七軀の神像のうち一軀で、拱手する女神坐像である。同社の祭神である倭迹々日百襲姫命の像として重要文化財指定を受けている。

檜の一材より全容を丸彫し、白下地彩色を施す。その姿は体の輪郭や衣縁など、ゆるやかな曲線により構成されており、穏やかな表情、胸や膝の薄い体型などとともに、平安時代の特色を示している。やや面長で頬が豊かな顔立は十一世紀半ばないし後半の作例にまみられるものであり、表情が明るく、全体に大らかな趣が感じられることからすれば、遅くとも十二世紀前半よりは降らない製作とみてよいだろう。

全体に簡潔な彫り口とし、下半身を省略気味に表すのは神像彫刻としての約束事に則っているが、各部の比例は整い、像容が端正にまとめられており、優雅な姿のうちに神像としての威厳をよく表している。坐高二尺と神像としては大きく、そのできばえとあわせて四国地方に伝来した神像の中でもとりわけ注目される一作といえる。



【工芸品】

3. 太刀たち〈銘備前国長船住守家造めいびぜんのかにおさふねじゆうもりいえつくる／文永九年壬申二月廿五日ぶんえいくねみずのえさるにがつにじゅうごち〉 1口

区分：重要文化財（昭和9年1月30日指定）

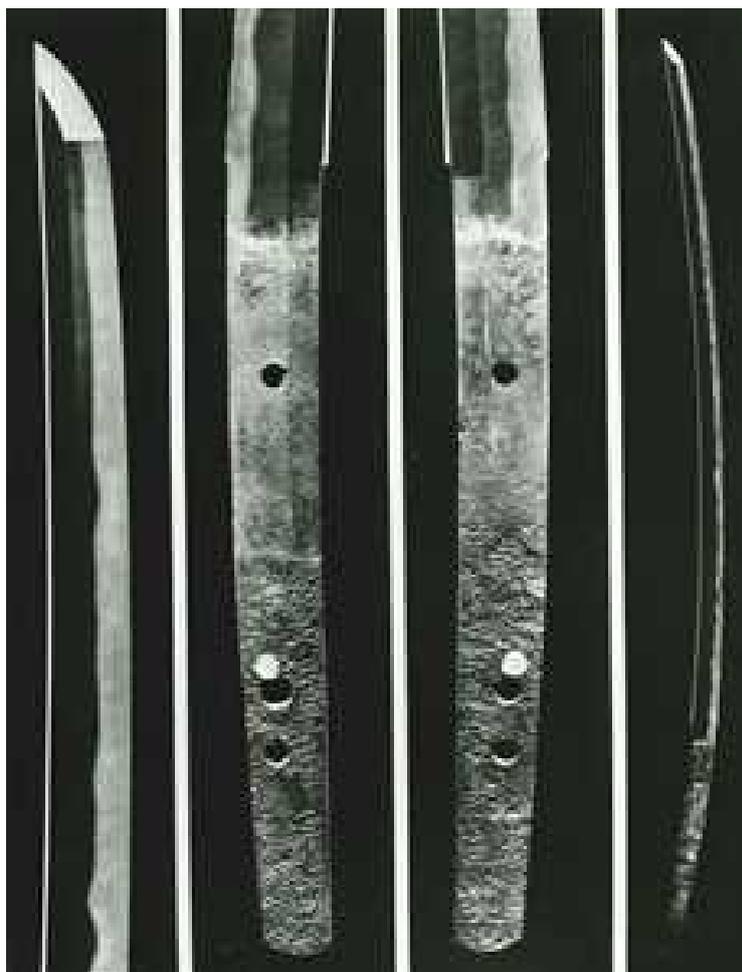
種別：刀剣

法量：刃長74.1cm 反り2.2cm

時代：鎌倉時代（文永九年＝1279）

鑄造，庵棟で小鋒の太刀姿。茎の表裏に長銘による刀工名と年紀を切る。作者である備前長船守家は，鎌倉後期に長船にて活躍した名工の一人である。本作は，守家の代表作の一口で，鍛えは小板目に木肌が交じり，沸え主体の乱れ映りが鮮明に立つ。刃文は，丁子乱れを主調に尖り互目が交じり，変化に富んだ雅味のある作風である。

もとは，越前福井藩松平家に伝来したものである。



4. わきざし脇差 めいびしゆうおさふねもとしげ銘備州長船元重

1口

区分：重要文化財（昭和29年3月20日指定）

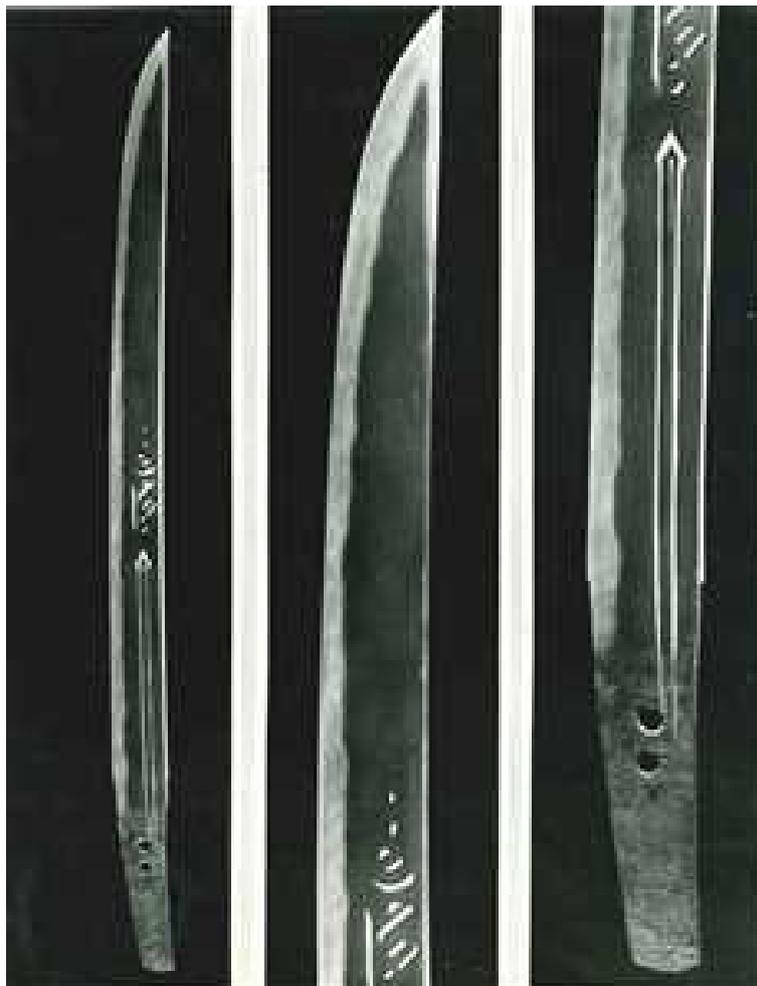
種別：刀剣

法量：刃長42.7cm 反り0.4cm

時代：南北朝時代 14世紀

平造，三ツ棟で，身幅が広く，やや寸が延びて反りのついた姿は，南北朝時代の脇差の典型である。鍛えは，大板目が肌立ち，地景や地斑があつて相州伝の作風を呈している。表裏に梵字，刀樋，素剣の彫物がある。本作は，備前国長船元重二代の作とされ，刃中の働きが盛んで，変化の激しい出来は，同工の最高傑作として評価が高い。

もとは，鹿児島藩島津家に伝来したものである。



ほんこぎねかちいろおどしはらまき
5. 本小札勝色威腹巻

1 領

区分：未指定

種別：甲冑

法量：鉢高 14.0cm 胴高 40.0cm

時代：江戸時代 18世紀

鉄錆地二十八間二方白星兜に、胴は背引き合わせの腹巻で、背板が着く。兜の鍔、胴、背板ともに、いずれも鉄革一枚交ぜ盛上黒漆塗本小札を勝色毛引威としたもので、これらを中心に、同仕様の大袖と壺袖、喉輪と面頬、籠手、佩楯、臈当等の小具足がすべて揃った皆具足である。

伊予国今治藩久松松平家に伝来したもので、総毛引の威し、金具等、非常に精緻な製作が施されている。江戸時代中期における大名具足の典型を示す貴重な遺例である。



【書跡・典籍】

6. 医学書 (崇蘭館本)

44件 (275冊)

区分：未指定文化財

種別：書跡・典籍

時代：宋時代～清時代

典医であった京都の福井家に伝来した医学書のまとまりで、「崇蘭館本」として夙に知られている史料群である。

本史料群は、明版を中心とする中国版本からなる。なかには、南宋版をはじめとして、わが国にのみ伝存する稀覯本なども含まれている。

わが国における医学書受容のあり方、漢方・本草学などの東洋医学史、出版・印刷史、交流史などを研究する上で、まとまって伝来した数少ない医学書の史料群として極めて重要であり、国内外において高く評価されている。



【考古資料】

7. ^{つぼがたどき}壺形土器

1 箇

青森県十和田市滝沢字川原出土

区分：重要文化財（昭和49年6月6日指定）

法量：高42.0cm，口径13.5cm，底径約11.6cm

時代：縄文時代

開き気味の口縁部に短小な頸部をつけ、楕円形の大きな胴部をもつ典型的な壺形土器である。口縁部には縄文を施文し、頸部は無文、胴部には肉彫り的な技法で磨り消し縄文を巧みに用いた優雅な雲形文くもがたもんが全体にくっきりと描出されている。胴部の下方は二本の並行沈線で区切られ、それ以下底部の近くまで縄文が施されている。口縁の内面及び外面の所々に赤彩の痕跡が見られるが、恐らく製作当初は、全面に赤色顔料が塗布されていたものと思われる。口縁と底部のそれぞれ一部に欠損が認められるが、現在は修復されている。

この土器は、丘陵の傾斜地を整地した時に、偶然単独で発見されたもので、発見当時は真っ赤に彩色されていたという。縄文時代晩期中頃、大洞式おおほらの壺形土器としては極めて大形の個体であり、一部に修復部分もあるが総じて遺存状態も良く、わが国縄文土器の代表的な作例のひとつである。



【工芸技術資料】

8. 栗鼠に葡萄文蒔絵箱

1 点

作者：中野 孝一（重要無形文化財「蒔絵」（各個認定）保持者）

制作年：平成29年（2017年）

法量：高13.4cm 縦16.3cm 横21.3cm

備考：工芸技術記録映画対象作品

本作は、黒漆地に肉合研出蒔絵による栗鼠と山葡萄を配した、深い被せ印籠蓋造の箱である。素地は、檜の柁材を使用した指物木地であり、その形態はサントリー美術館が所蔵する国宝「浮線綾螺鈿蒔絵手箱」（鎌倉時代、13世紀）から影響を受けている。木地には、作者によって、木固め、布着せ、地付け、錆付けなどの下地、下塗り、中塗りが施されている。

作者は、箱の面にとらわれない連続的な構図に、意匠化した小動物や植物を動感豊かに配す図案を得意とするが、こうした図案は中塗りを施した箱に直接下図を描いて練られる。

本作で用いているのは、肉合研出蒔絵という蒔絵の中で最も複雑な技法である。

本作は、高上げを得意とし、漆と蒔絵による光と色彩の表現にこだわりを持つ作者の技量が遺憾なく発揮された作品である。平成29年度工芸技術記録「蒔絵－中野孝一のわざ－」の対象作品。



がらすきぬいともんひらぼち ひとしずく
9. 硝子絹糸紋平鉢「一雫」

1点

あだち まさお
作者：安達 征良

制作年：平成29年（2017年）

法量：高8cm 径32cm

備考：第64回日本伝統工芸展 文部科学大臣賞 受賞作品

溶けた雪の一雫が落ち、同心円状に波紋が広がる様子をガラスの器として表現した作品である。和紙を透かして見るような柔かな光を表現するために、様々な技法上の工夫が凝らされている。

本作品の造形にはサギング技法が用いられている。ガラス板の状態の時にあらかじめ施された同心円状のカットが、電気炉の中で溶けて垂れ下がり、器底の波紋状の模様となった。作品表面内側は共擦りしてマットな質感を出した。外側の下半分には、白ガラスを判押しして降り積もる雪のような半透明の文様を、上半分にはカットガラスの技法により、ゆらぎのある細い線状のカットを一面に施した。更に口縁部には金彩を焼き付けて仕上げた。

本作は、第64回日本伝統工芸展で文部科学大臣賞を受賞した作品である。



【アイヌ文化関係資料】

10. アイヌ文化関係民族資料

アイヌの生活用具等 計 95 件 392 点

区分：未指定

時代：19～20 世紀

個人や古美術商を通じて収集されたコレクションで、木彫や刺繍など工芸的価値の高い資料が含まれ、展示や研究からアイヌ文化復興に寄与する資料と考える。

カパラミプ（木綿衣）は、単衣に、文様を切り抜いた大巾の白布を縫いつけたものである。北海道太平洋岸の日高東部などに多く見られる。本件は、静内地方の伝承者が所蔵し、昭和 43～47 年（1968－1972）頃に実際に着用していたもので、その様子を写真等で確認できる。アイヌ関係資料は由来等が残されていないことが多いが、本件は年代や背景等が分かっている貴重な資料である。

イタ（盆）は木製の平らな盆である。食べ物を盛りつける食器のひとつとして使われた。円形や方形や半円形など様々な形状がみられ、表面には文様を施されることが多い。

2013 年、経済産業省の伝統的工芸品として「二風谷イタ」が指定された。渦巻きを模した文様、鱗を模した文様が「二風谷イタ」の特徴となっている。本件もその特徴を備えている。裏面に、「カヤノ作 1973.12」と刻まれており、参議院議員を務めたアイヌ文化伝承者萱野茂（1926－2006）の作と推定される。



カパラミプ（木綿衣）



イタ（盆）

【アイヌ文化関係資料】

11. アイヌ文化関係美術資料

アイヌ風俗画等 計4件（3幅、1巻）

区分：未指定

時代：19世紀

幕末から明治期にかけて、アイヌ以外の民族により描かれたアイヌ風俗画は、アイヌの生活文化を記録し、視覚的に伝える民族誌の観点から高く評価される。

「紙本著色 酒宴図 一幅」は、幕末から明治にかけて蝦夷地で活躍した絵馬屋平澤屏山（1822 - 1876）が慶応3年（1867）に制作したものと考えられる。アイヌの儀礼の様子を描き、人物や民具、遠景の地形等の描写が精細である。

「絹本著色 愛奴歎舞 一幅」は、「明治癸未十一月巴港客中応贈寫 羽陰穂菴芸」の墨書から、秋田の日本画家平福穂庵（1844 - 1890）が明治16年（1883）の北海道函館滞在中に、アイヌの儀礼を題材に制作したものである。

「紙本著色 唐太島奇覧 一巻」は、文化4～5年（1807 - 1808）に会津藩が西蝦夷および樺太に1500名が出兵した際、藩士の山川賢隆が「蝦夷島奇観」を模して、蝦夷地の風物や出来事等を記録し、文化6年（1809）にまとめた貴重な史料である。

ほかに、「紙本淡彩 アイヌ父子 一幅」を購入した。



酒宴図



愛奴歎舞